

# 生涯の友と出会い、自身を磨く機会 を与えてくれた航空機派遣事業

第16回「国際青年育成交流」事業 ドミニカ共和国派遣

独立行政法人 日本貿易振興機構  
熊本貿易情報センター × 安井 裕太郎

## 事業で得たことは何ですか？

本事業を通じて得たことは数え切れませんが、特に挙げたいのは、第一にかけがえない仲間。共に派遣された日本青年はもちろん、現地青年とも連絡を取り合っています。現地青年との文化交流およびディスカッションは最も印象的なイベントの一つです。ラテンのダンスを現地学生と一緒に踊った後、教育や環境問題についての熱い議論を交わした後に生まれる格別な一体感は今も鮮明に覚えています。

第二に、日本青年たちの姿勢から学んだチームワークと問題解決能力。

派遣前後や派遣中、意見のぶつかり合いもありましたが、物事を決め前に進めるためにも、チームメイトのそれぞれ長所を活かし、各自が協調しながら問題の原因をつきつめ、課題解決に向けて動いていくことが常に求められました。

第三に日本人としてのアイデンティティ。日本文化や歴史、政治などを紹介・説明する中で、私はいかに自身が日本のことについて無知かということを感じ知らされ、日本人としての自覚を持ち日本について学ぶ必要性を痛感しました。

## 事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

事業参加後、「日本と海外を繋げるような仕事がしたい」という気持ちが更に強くなり、日本貿易振興機構(ジェトロ)に就職しました。

事業経験は現在のキャリアにおいても活かされています。例えば、海外事業者に連絡する際は全く怖気づくことなく、かつ現地の文化的背景を自然と意識しながらやり取りをすることが出来るようになりました。事業に参加したからこそ、日本について自信を持って説明をすることも出来ています。更に、仕事をする上ではチームワークが重要です。交流事業で学んだ「いかにチームメイトの長所を見つけて、それぞれの長所を活かして効率的に課題に取り組むか」ということを常に意識しながら仕事を進めるようにしています。

交流事業に参加してなければ今のような自分はきっとなかったと思います。



香港FoodExpo2014にて、くまモンと一緒に熊本県産品の輸出支援を行います。

## これからやりたいことは何ですか？

まずは海外に駐在し、海外事業者との密度の濃いネットワークを構築して、現地で日本企業の輸出や現地進出、現地企業の日本進出(直接投資)をサポートしていきたいと考えています。

一方で日本の企業や教育機関のグローバル人材育成にも積極的に関わっていきたくです。

自身は幸運にも学生時代に留学や国際交流事業に参加する機会が多かったので、その経験をより多くの若い世代に伝え、少しでも海外に目を向けて頂きたいと思います。それは将来的に日本企業の海外展開の加速化および競争力の向上に繋がることだと強く信じています。



### 主な略歴

- 2009年 京都府京都市出身  
内閣府の国際青年育成交流事業に参加
- 2010年 立命館大学およびアメリカン大学を卒業。  
独立行政法人 日本貿易振興機構(ジェトロ)に入構。  
機械・環境産業界にて地域間交流支援(RIT)事業を担当。
- 2013年 熊本貿易情報センターに配属。  
熊本県内企業の貿易支援業務を担当。

# 自分が日本を代表しているという 初めての経験

第2回「国際青年育成交流」事業ジンバブエ派遣  
Veolia Water Japan × 吉川 恵美子



## 事業で得たことは何ですか？

南部アフリカはジンバブエへの派遣が決定した時、周りはとても心配し、私自身もとても身構えていました。インターネットなどない当時、ジンバブエについての情報はとても限定的だったからです。

しかし降り立った首都ハラレは、整然とした街並みに満開のジャカランダの紫の花が咲き誇る美しい大都会でした。スーツをびしょと着こなしたビジネスパーソンが足早に

颯爽と行きかう様子は、それまでに想像していた「アフリカのジンバブエ」からはかけ離れていました。「アフリカ」というだけで、無意識のうちに自分よりも下に見ていたことに気づき、そんな自分を恥じました。この経験以来、どのような国についても、あまり偏見や先入観を持たなくなったのではないかと思います。20代のうちにこのような気づきを得られたことは、その後の海外経験に大いに役に立ったと思います。

## 事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

この派遣事業で初めて顔を合わせた派遣団員8名は年齢、職業、出身、バックグラウンドがさまざまでした。時に意見の相違から衝突することもありました。

ジンバブエの各地で「日本では普段あなたは何語を話しているの？英語なの？」などと聞かれて、日本語の存在から説明しないといけなかったり、博物館に飾られている立体世界地図の中ですら、日本の国土の形状が実際とは異なっているなど、日本という国がまだまだ知られていないことを実感しました。ほとんどの場合、彼らにとっては私達が初めて接する日本人ですし、もしかしたらその人生で唯一接触を持った日本人になる可能性もあります。そのうち派遣団員の中の小さな行き違いなどどうでもよくなり、ジンバブエの人々にいかに日本について知ってもらおうかという共通の目標のもと、自然とまとまってきました。現在は外資系企業で管理職を務めて



います。社内外の関係者の意見を取りまとめ、折衝し、日々の業務を進めています。国内だけでなく、フランス本社や香港にいる同僚とのやり取りも頻繁に発生します。考えてみれば、相手を尊重しつつ、共通の大きな目標に向かって足並みを揃えていく、という姿勢は、内閣府事業への参加によって育まれたのだと思います。

## これからやりたいことは何ですか？

ジンバブエに派遣されてからもう20年が経ちましたが、今でも、「日本では何語を話しているの？」と質問された時のショックは忘れられません。あれから20年後の現在のジンバブエでも、同じ質問をされるのでしょうか。思えばあれが日本を代表する、初めての経験でした。

私は事業後大学を卒業し、民間企業に就職しました。以来ずっと広報・コミュニケーションという「伝える」仕事に携わっています。その経験をもとに、ジンバブエに限らず、諸外国に対して日本の情報を発信することをライフワークとして取り組んでいければと思っています。

### 主な略歴

- 1995年 東京都港区出身  
内閣府の航空機派遣事業に参加（ジンバブエ派遣）
- 1997年 青山学院大学国際政治経済学部卒業  
SAPジャパン入社 広報担当を務める
- 2002年 森ビル入社 六本木ヒルズ広報担当を務める
- 2006年 米国ミシガン州立大学大学院に進学 広報学を専攻
- 2008年 米国ワシントンコア入社  
リサーチ・プロジェクト・コーディネーターを務める
- 2011年 ヴェオリア・ウォーター・ジャパン入社 コミュニケーション部マネージャーを務める

# 一生に一度の経験 ミャンマーに行って人生が変わった！

第8回「国際青年育成交流」事業ミャンマー派遣

内閣府

×

吉田 直子

## 事業で得たことは何ですか？

内閣府事業に参加して、ミャンマーに対する印象は大きく変わりました。派遣前はミャンマーの政治に関心があったのですが、ミャンマー人招聘青年や受入担当者と交流を深める中で、次第に政治から人に目を向けるようになりました。

派遣期間中は、当時軍事政権下で派遣プログラムの日程も厳しく管理されていると思っていたところ、突然バスのルートを変更して受入担当者の家に立ち寄り家族を紹介してくれるなど、ミャンマー人のおおらかさを感じ取る機会がありました。

特に、団員を自分の娘や息子のように可愛がってくれた受入担当者は、ミャンマー語で

アペー（お父さん）と呼ばれて親まれ、アペーとの出会いによって、ミャンマー人が好きになり、ミャンマーの社会、経済、文化などを多面的に理解したいという気持ちが更に強くなりました。本や人からの話でしか知らなかったミャンマーでしたが、実際に行ってみると、自由が制限された中においても、家族を大切に、希望をもって前向きに生きる人々の姿があり、ダイナミックなミャンマーの現状を知ることができました。また、23日間の派遣日程を共に過ごした団員との間には、生涯続く友情が培われました。これらが事業で得た最大の収穫です。

## 事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

私にとってミャンマー派遣は非常に印象深い経験であり、帰国後は、どうしたらまたミャンマーに戻れるかということで頭がいっぱいでした。翌年の大学院の夏休みには、ミャンマーでインターンを受入れてくれるNGOを見つけ、現地に赴き、派遣中には訪問しなかった乾燥地域や国境地域で保健関連プロジェクトの企画や実施のお手伝いをしました。これを契機に、国際交流や国際協力を通して、ミャンマーとかわかりたいという気持ちが強くなり、事業に参加した6年後には、ミャンマーにおけるJICAプロジェクトの保健・教育分野の専門家として、少数民族が住む国境地域で、学校保健や識字教育等の活動に取組みました。

その後、ミャンマーだけでない国際交流にもかわかりたいとの思いが強くなり、現在は、内閣府の国際交流事業を担当しています。

## これからやりたいことは何ですか？

事業に参加して、10年以上経った今も、日本人派遣団員や現地に出会ったミャンマー人との交流は続いています。これからもこうした絆やネットワークを大切にして、草の根レベルの交流を続けていきたいと思っています。

また、ミャンマー派遣以来、ミャンマーへの思いや関心は強まり、それは今も変わりま

せん。将来はミャンマーで人の役に立つことをしたいと思っており、具体的には、辺境地域での学校建設・修復プロジェクトを立ち上げ、よりよい学習環境で、ミャンマーの子どもたちに教育を受けさせたいと考えています。



### 主な略歴

- 県×市出身
- 2001年 内閣府の航空機派遣事業に参加（ミャンマー派遣）
- 2002年 英国サセックス大学院大学に進学 開発学を専攻
- 2004年 ミャンマーで活動する国際協力NGOに勤務 緊急支援や保健関連プロジェクトの支援業務を行う
- 2006年 研修コーディネーターとして研修機関に勤務
- 2008年 保健・教育分野の専門家として、JICAミャンマーの「麻薬対策・貧困削減プロジェクト」に従事
- 2012年 内閣府青年国際交流担当として勤務



# 多くの出会い ～様々な考え・生き方に触れて～

第20回「国際青年育成交流」事業 × ドミニカ共和国派遣  
慶應義塾大学大学院 × 吉野 泰守



## 主な略歴

東京都出身

桐朋高等学校

武蔵野美術大学  
造形学部建築学科

慶應義塾大学大学院  
政策・メディア研究科

2013年 慶應義塾大学大学院在学中  
に内閣府の「国際青年育  
交流」事業に参加

## 事業で得たことは何ですか？

私は3カ国の派遣先のなか、第一志望にドミニカ共和国に派遣されました。派遣前は中南米の海が綺麗な陽気な国という印象しかなく、今思うととても安易な気持ちで希望してしまつたと反省させられます。団員のなかには、ドミニカ共和国の公用語であるスペイン語を話せる団員が2人もおり、また帰国子女など留学経験者も多く、語学のレベルがかなり高かったです。そんななか、語学が得意でない私は面を食らってしまったところもありました。私でいいのかという気持ちもありましたが、選ば

れた以上しっかりと事業に関わりたいと思っていました。

内閣府といった国の機関の事業にもかかわらず、決まりきった形式的なことを遂行するのではなく、事業自体を派遣青年で作り上げていく余地が沢山あるというのが、この事業の重要なところでもあります。事前研修、自主研修を通して、なにを学び、経験し、なにを伝えにいくのかと団員各々が考えなくてはなりません。そこに、事業の意味合いがあると私は思います。また、派遣後の今も事後活動を通してその意味合いと向き合い問い続ける必要があると思います。

## 事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

私は派遣前まで、日本政府によるドミニカ共和国への移住政策があったことを知りませんでした。訪問先のひとつにハイチ共和国との国境に位置するダハボンという地方自治体の日系人コミュニティがありました。もっとも印象に残っている訪問先です。特に、その地方の日系人コミュニティの共同墓地にお線香をあげ、手を合わせて頂いたことが心に残っています。現在、日系人コミュニティは以前ほどの強い絆が薄れ、移住当時の記憶も世代が変わるとともに薄れています。そんななかでも今も墓地は守られていることが、当時の日系一世に方々の移住への困難やその地に根ざすための尽力というものの痕跡を残し、たった数十分しか訪れていない私の心に彼らの生きていく凜とした強さを強く訴えてく



(写真左:カンボジア王国招聘青年 Chhim Sathupeap とカンボジアJICA事務所 2014年8月)

るものがありました。

派遣期間中は内閣府の事業の派遣団員のひとりとして守られた環境のなかでの訪問でしたが、そのなかでJICAの青年海外協力隊員の方々の活動する姿も日系一世の方々と重なり、単身で地域に入り込んだ草の根的活動に素敵だなという思いを強く抱きました。

## これからやりたいことは何ですか？

現在、私は大学院においてカンボジア王国・シェムリアップ中心市街地の都市の歴史研究をしています。事業で出会ったカンボジア王国招聘青年の Chhim Sathupeap と強い絆を構築でき、カウンターパートナーとして特に現地調査の際助けて頂いています。現在までカンボジア王国での活動を踏まえ、ひとつの選択肢として青年海外協力隊への応募も考えています。

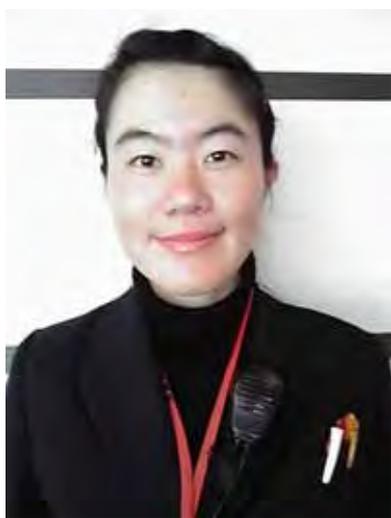
また、このまま研究を深めていく道も考えながらも、以前医師になりたかったこともあり医学部への再チャレンジも今でも強く心のなかにあります。研究活動をしながらかたをしっかりと見定め彼ら同様凜と強く生きていきたいです。

# ヨーロッパで活躍の原点 北欧と東欧の間、バルトでの体験

第13回「国際青年育成交流」事業バルト三国派遣

劇場案内 × 古屋 さおみ

## 事業で得たことは何ですか？



初めてバルト三国へ派遣される団として、オリンピック金メダリストの木村団長(通称=カントク)に出会えた事、チームワークを鍛えられた事、毎年、クリスマスカードがホストファミリーから届く事、いずれもいまだにKeep in touchな部分です。ノルウェーの高校で交換留学の経験が私にバルトを呼び寄せて、バルトがルーマニアに繋がりました。それぞれ、その国でしか喋らない言語、まさに今、白夜で明るい夏の空、自然が豊かな国、ロシアの力が及んだ地域…。毎夏ルーマニアへ向かう際、エストニア・ラトビ

ア・リトアニアを飛行機の窓から見るととても懐かしく思います。また、この派遣で知った杉原千畝氏ですが、実は、今年閉校した我が福岡市立大名小学校の先輩である広田弘毅氏ともご縁があったそうです。観光案内所勤務時代、同期で別の団の方が道を尋ねにみえ、声を掛けられて驚いた事もありました。人とのご縁、欧州への派遣の土台作り、バルトへの派遣は、色々とベースになっています。

## 事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

世界三大演劇祭の一つ、ルーマニア・シビウ国際演劇祭にTicketingボランティアとして、2011年から毎年参加しています。私の留学、劇場勤務、海外経験をフル活用しながら、今年はTeam唯一の日本人として、10日間51公演でお役に立てました。内閣府の派遣を経験させていただいたお陰で様々な面で強くなりました。例えば、大使館の人達が観劇にいらっしゃるV.I.P.対応、ハードスケジュールに耐える事が出来る体力、リトアニアからの公演勤務、世界中からのお客さんに英語とルーマニア語で対応、今ではTeamも「こんにちは・ようこそ・たのしんで」と、日本人のお客さん達に言えるようになりました。発展途上国故、救急車で運ばれる時のインフラの悪さ(道のガタガタ)、日常茶飯事の停電や断水にも驚かないのはバルトでの経験のお陰です。これはノルウェーやアイルランドではわからなかった



事。バルト出発前の研修(全日空ホテル)で東儀秀樹氏に質問していた私が、今では日本代表の一人として野村萬斎氏の公演のお世話をしています。クレイマーにも余裕と自信を持って対応出来るこの頃です。

## 主な略歴

- 1998年 福岡県福岡市出身  
オスロハンデルスギムナシウム高校へ交換留学
- 1999年 博多座劇場案内開始
- 2000年 アイルランド留学
- 2002年 大野城まどかぴあ公演ボランティア開始
- 2004年 国民文化祭映像企画委員
- 2006年 福岡市観光案内所勤務開始  
内閣府の航空機派遣事業に参加(バルト三国)
- 2010年 ㈱ピクニック公演スタッフ開始
- 2011年 シビウ国際演劇祭ボランティア  
Ticketing所属(2011年-2014年)
- 2013年 ㈱d.o.n.公演スタッフ開始  
㈱スリーオクロック公演スタッフ開始  
能笛免状取得

## これからやりたいことは何ですか？

文化における世界征服です。欧州に出て、日本に無い向こうの劇場の良さを知りました。帰国して、日本文化も学ぶようになりました。能狂言・歌舞伎・文楽に落語等、仕事を繰り返して行く内に、日本カンパニーの欧州公演で働く機会にも恵まれました。日本に帰って数々の来日カンパニーの気持ちも理解出来るようになりました。

地方都市の博多っ子故に、様々なジャンルの公演で16年間働けて、Team workが素敵なシビウのTicketing Team所属故、4年間で40日のフェス期間中に約150公演頑張れました。こんな人もあまりいないと思いますので、どうせなら世界一、色々な経験のある劇場の表方を極めようと思います。

貧しさを知らなかった私  
豊かさを教えてくれたミャンマー  
～自身の経験を日本の子どもたちへ伝えたい～

第13回「国際青年育成交流」事業ミャンマー派遣  
× 古田 明子  
私立中学・高校教諭



#### 主な略歴

- 2003年 佐賀県嬉野市出身  
長崎日本大学中学  
高等学校に勤務
- 2006年 内閣府の国際青年  
育成事業へ参加し、  
ミャンマーへ派遣。
- 2014年 現在も長崎日本大  
学中学・高等学校  
に勤務し、子供た  
ち共に日々成長中。

#### 事業で得たことは何ですか？

ミャンマーで豊かさと貧しさについて考えるきっかけを得ることができました。内陸の村でホームステイをした時のこと、私は体調が悪くなった他の団員に代わりホームステイ先が途中で変わりました。そこで家の中の雰囲気が大きく違うことに気がきました。最初の家では、言葉は分からないけど家族の声が家中に響いていました。テレビが無い家です。移った先の家にはテレビがあり、家族が集まってテレビを見ていました。この時、テレビの音が鳴り響く家に違和感を持ったのを覚えています。物寂しさを感じました。何が豊かさなのか考えさせられる場面でした。また、なり



ふり構わず必死にお金をせがんでくる子どもたちとの出会いから、“貧しさ”の意味を分かっているつもりになっていた自分に気がきました。“貧しさ”には悲しさよりも必死さがありました。呑気な自分を恥じました。後日談、テレビのない家の息子は海外に出稼ぎに行っていました。また、ふと考えました。

#### 事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

まず日本やミャンマーの優秀な学生・若者たちとの出会いからです。英語が堪能で、人の何倍も働くことができる彼らとの出会いは刺激的でした。最初は圧倒され、教師として数年働いただけのちっぽけなプライドが良い意味でへし折られました。そして、国籍や年齢を超えて育まれた友情は宝物となりました。彼らのように、いや彼ら以上に世界で活躍する子どもたちを育てていきたいと強く思いました。

二つ目は自身の視野が広がったことです。物の考え方も今回の事業で得たものが礎となっています。単なる海外旅行ではなく、日本の代表として派遣された自身の

経験はあまりにも強烈で、今でもその意味を反芻し、年々経験に深みが増しています。ここに書き記すことができない沢山の経験は人生の糧となっています。



#### これからやりたいことは何ですか？



使命感というと照れくさいですが、教師という仕事に責任を持って取り組もうと思います。このような機会を国から頂けたことの意味をしっかりと考え、経験を自身だけのものにせず教育活動に従事していきたいです。また、ミャンマーとの関わりも大切にしていきたいと思っています。日本とミャンマーの子どもたちがさまざまな形で交流し、互いに学び合える機会を提供していきたいと考えています。